

重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の患者血清抗体検査について

1 背景

重症熱性血小板減少症候群（以下「SFTS」という。）は、2011年に中国で初めて発見されたが、その後の調査で2006年秋の感染事例（患者数14名）が最も早い事例と考えられている。現在、中国では中部を中心とする12省で流行が確認されており、2011～2012年の患者数は計2,047名、死亡者数は129名（致死率6.3%）と報告されている。

SFTSの原因はマダニによって媒介される「SFTSウイルス」であり、中国の調査では、マダニのうち「フタトゲチマダニ」と「オウシマダニ」によって媒介されるものの、マダニがウイルスを保有する割合はかなり低いとされている。

一方、我が国では、2013年1月に山口県で初めて患者が確認されており、2014年2月現在では西日本の13県で53名の患者が確認されている。これら患者のうち、21名が既に死亡しており、致死率は39.6%に昇る。また、本県でも、2013年7月に2名の患者（うち1名死亡）が確認されている。

2 主な症状等

主な自覚症状は、発熱、食欲不振、疲労、吐き気、腹痛、嘔吐、倦怠感、下痢等である。

SFTSウイルスの潜伏期は6～13日で、発症後1～7日間程度、発熱・血小板減少・白血球減少等がみられ、最悪の場合、発症後9日程度で多臓器不全や播種性血管内凝固症候群により死亡する。

3 全国のマダニ調査状況

26自治体でマダニのウイルス保有状況調査が行われ、捕獲された18種4,000匹以上のマダニのうち複数のマダニ種（タカサゴキララマダニ、フタトゲチマダニ、キチマダニ、オオトゲチマダニ、ヒゲナガチマダニ等）からSFTSウイルス遺伝子が検出された。その保有率はマダニの種類により5～15%程度と差異がみられた。

また、SFTSウイルスを保有するマダニは、既に患者が確認されている地域（9県）に限らず、報告されていない地域（14道府県）においても確認された。

4 県内のマダニ調査状況

本県内でも上記のマダニ調査を実施しており、捕獲されたマダニからSFTSウイルスが検出されたが、生息するマダニの種類やウイルスの保有状況など詳細な調査について現在も継続して実施している。

5 県内患者のウイルス検査

本県内におけるSFTS患者のウイルス検査結果については、次のとおりである。

症 例	当センターでの 検査結果	国立感染症研究所 での確認検査結果	判 定
2013年7月に備中保健所井笠支所管内で発症した患者1名（80歳代女性、後日死亡）	血液等の遺伝子検査を実施し、陽性と判定	陽性	SFTSウイルス感染を確認
2013年7月に岡山市保健所管内で発症した患者1名（80歳代女性、後日回復）	血液等の遺伝子検査を実施し、陽性と判定	陽性	SFTSウイルス感染を確認

6 患者の抗体検査

SFTS ウイルスに感染した患者の体内では抗体が作られるため、抗体検査を実施すると感染履歴が明らかとなる。また、当該患者が回復した後、体内では長期間にわたり抗体を保有することが報告されている。

このため、当センターでは、SFTS ウイルスの感染履歴を検査する場合に備え、既に回復した県内在住の元患者 1 名から血清を入手し、抗体検査に対応できるような体制を構築している。

SFTSの発生状況

図2 重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の
発症月別届出報告数 (2013年)

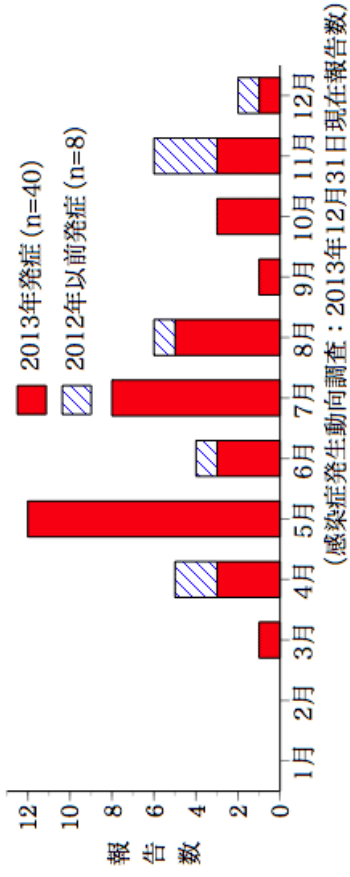
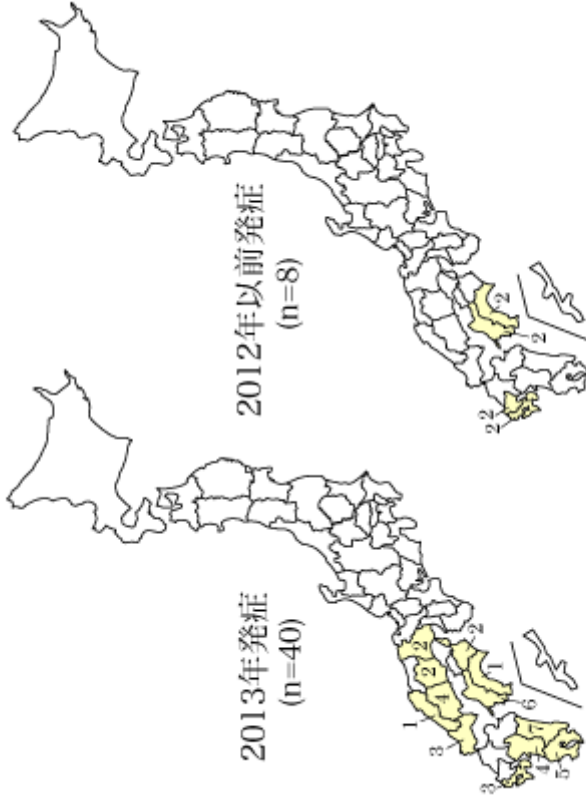


図1 フタトゲチマダニ(左)及びタカサゴキアラマダニ(右)



図3 重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の
都道府県別報告状況 (2013年)



(感染症発生動向調査: 2013年12月31日現在報告数)

